

新春に詠む短歌

筑波風に吹かるる兔の眠のかげり南天の実食べて輝け

兔の行動は敏捷で活発です。今年は活動的な年でありますよ
“難を転じて福となす”
和希 明美

大洗の荒あらしい波に旨くなる生でも焼いてもカキ本番に

家族で大洗に行った時岩ガキを食べました。白く大きな身の甘
さに思わず「つまい」と大きな声を出してしまいました。
海老原鮎子

明暗を御破算にしてゆく年に新たな夢をバトンタッチす

いろいろあつたがみんなみんな過ぎた事。さあ二十三年の新しい夢に向かつて元氣よくスタートしよう。
山口 あさ

あらたまの年の願いをこめて打つ梵鐘は杜の冷気をふるわす

若い頃は、元朝まいりも遠出をしたものですが、近頃は市内だけにになりました。冷気の中に透る鐘の音は本当にいいものです。
海老澤幸子

八十路まだ先は長しと顎ひきて胸伸ばしつウオーキングに行く

シニアのスポーツ教室が、最近賑やかで、健康は自分で作るもの、との意識が盛ん。友人も出来て楽しい。
貝塚 高秀

平安の世より食まれし真桑瓜二つに割れば歌がとび出す

直売所などで今も目にする真桑瓜は昔から庶民に親しまれ万葉集にも歌われているという。懐かしい甘い香りと共に歌がとび出してきた。
相川 盈子

温暖のこの地に根付き四十年、新春の朝陽はまた昇る

この地は空気と水も良く、農作物も豊富で、誠に健康的である。
お蔭でほとんど病気になるらずに今日に至った。
平野 金一

蝶ふたつ高くのぼりてもつれ舞ふ葱の畑より麦の畑へ

あれは紋白蝶の番か、つかず離れず愉しげに遊んでいる。太々と青
つ葱の上から緑の麦畑の上の空で。私はこんな長閑な風景が好きだ。
柳田 寛

さくら樹の影に紛れて鴨二羽が首を垂れる乙戸沼の岸

ときどき散歩する乙戸沼。汚泥が除かれ、噴水も設置されて快適になり、歩くことが楽しみになった。
宇留野むつみ

待ちまちし初日おろがむ今を生く命に謝しつつ「凡」に生きんと

水平線に初日が昇ってくる一瞬を大洗の海岸で拝んだ。今年も元氣で迎えられた元旦、感謝しながら平凡に生きる事を祈った。
金丸 玉貴

滝平二郎の切り絵の中の竈よ まのあたりに顔つ農村風景

作者の切り絵には、懐かしいふる里や、元氣な子どもたち、家族の絆など、失いつつある素朴で自然豊かな風景がよみがえってくる。
井上 寛江

旧道の朽ちて小さき石柱にかろうじて読める「日先神社道」

荒川沖の旧道で見つけた石柱。いつの時代のものだろうか。
右羽の日先神社へ参詣する人たちの道標に違いない。
平澤 良子

ゆくりなく六十路の扉開けつるも年の始めを憧れて待つ

自分では若いつもりでいるが六十代を走っている。新たな決意を促してくれるような年の初めを、少年の如く、憧れて待っている。
宮本 唯男

東城寺ありきと伝ふ堂平見上ぐる尾根にパラグライダー浮く

土浦と新治が合併して早や五年。豊富な文化財の情報に接するのが楽しみです。
市島 紀郎

厨ごと趣味と子等言うもさからわず御節の黒豆丹念に煮る

台所仕事が好きで、普段から家族の喜ぶものを作っています。お正月の黒豆は、特に気をつけて料理します。
菊地 公代

七十日地底に耐へて還りたる命を確と抱き合ひたり

チリの鉱山事故で、三十三人の作業員が地下に閉じ込められたが、生きる望みを失わずに、全員救出されたニュースに感動する。
大越 里子

新春に詠む俳句

片言の増えて年玉増やしけり

年玉は「年賜」の意という。新年の祝儀として贈るものである。七五三あたりの子どもが格好の相手。今はお札が多くなった。

乗初めや太平洋の見ゆるまで

初詣を済ませた後、夫と太平洋を目指してドライブ。潮の匂いと新しい年の風を肌を感じながら広い海を眺めるのは清々しい。

つくばいの水に映りし実千両

茶室の庭先にある手水鉢の傍らに千両が植えてある。その真っ赤な実千両が水面に美しい影を映している。新年の彩りである。

真つ新たな軍手の握る鋏始

新しい年の豊作を願い、真つ新たな軍手に気概を込めて鋏を握る。田畑に添え物をして「カラス来ーい」と叫んだ少年の日が懐かしい。

今年こそ跳んでみたいな兎になりて

平凡であることも幸せというが、何か一つ手応えのあるものを得たい。卯年に因み、兎のように飛躍のある年でありますように。

遣り残すこともありけり去年今年

齢を重ねると、こんな筈ではなかったと思うことも増えてくる。それでもいいかと現実を受けとめ、緩く元気でいきたい。

感謝することより始む年女

娘が買って来た千支の「卯」の置物二つ。卯年生まれの母親に次の卯年を揃って迎えられるかなど考えた事もない。今を感謝したい。

成木責め着飾る子らは果樹となり

小正月の行事で、兄弟が神棚の前に整列し祖母にその年の豊熟を誓わされた。「成るか、成らぬか」、「成ります、成りません」と。

新春に詠む川柳

肝臓に屠蘇で年始の御挨拶

一年の始まり、いつもお世話になっている肝臓に、今年もよろしくと屠蘇を捧げる。

御慶述べちよつと余所行き孫の顔

やんちゃ坊主だと思っていた孫から、今年は改めて新年の挨拶を受けうれしいが、時の流れの早さも思い知らされます。

良いニュース聞きたい兎耳を立て

昨年はえらい難儀な年でした。円高不況、就職難、弱腰外交など、日の丸がしょんぼりです。今年こそ国民は朗報を聞きたいもの。

新春に友が増えそういい予感

今年こそ前向きに、趣味などにも大いに取り組みたいと思っている。沢山の良き出会いがあればと願いながら。

日の出待つ家族の笑顔初鳥

家族揃っての初詣、日の出も間近にお目出度いとされている初鳥の鳴き声、見上げれば茜雲と共に昇る初日の出、無病息災を祈る。

清麗の朝神の息吹に屠蘇祝う

元旦の朝庭に出てみると、いつと違う荘厳な空気を感じ、恙無きことに感謝して、今年も平穏でありますようにと祈る。

卯の年を跳ねて進めと気合入れ

今年は、十二支の卯の年。兎にあやかり、低迷している社会を敏捷・活発に前進させるよう、年の始めに気合を入れ直す。

筑波峰に兎と競う初詣

筑波登山も三年ほどご無沙汰をしていたので、今年には兎に負けないよう、元気に山頂の神社に初詣して、一年の健康を祈る。

大久保秀夫

加藤 節子

上村 しづ

狩谷 諭

沢辺 栄子

関沢 美江

古橋 初子

涌井 宏子

太田 鳴子

矢野 光子

富永 柳道

永井 花菜

関口 進吾

石引たか女

加藤 光山

近藤 稔夫